

* 関 勝 則 「時代を映した横浜の歌」 探訪。

《14》 街を変える!! 青江三奈の「伊勢佐木町ブルース」

江戸の材木・石材商吉田勘兵衛が現・中区や南区の海や沼地を埋め立て開発したのが吉田新田です。1874(明治7)年に「一つ目沼」と呼ばれた沼が埋め立てられ「伊勢佐木町」が誕生しました。町名は当地の道路整備に資金提供をしたといわれる中川次郎兵衛の屋号「伊勢屋」の「伊勢」、佐川儀右衛門の「佐」、佐々木新五郎の「木」を組み合わせ「伊勢佐木町」になったといわれています。

その後伊勢佐木町は、芝居小屋、寄席、映画館、老舗商店、百貨店などが建ち並ぶようになり、横浜随一の繁華街に成長していきます。1928(昭和3)年には通りの一部で日本初の歩行者天国が実施されたことでも知られています。

1968(昭43)年に青江三奈の「伊勢佐木町ブルース」により一躍全国に知れわたりました。青江三奈はデビュー曲の「恍惚のブルース」がヒット、「恍惚のブルース」の作詞者、芸名「青江三奈」の命名した川内康範と作曲家鈴木庸一のコンビで作られたのが「伊勢佐木町ブルース」でした。「♪あなた知ってる 港ヨコハマ 街の並木に 潮風吹けば〜」とハスキーな声で歌い出すこの曲により、伊勢佐木町は横浜情緒の漂う街として全国に認知されるようになりました。

川内康範は、青江に「ハーン」という吐息を入れるように指示したといわれ、イントロの独特の吐息やスカット「ドゥドゥビ ジュビドゥビ ジュビドゥヴァ」が、今までの歌謡曲にはない強いインパクトを与えたといわれています。

伊勢佐木町にあった明治末に創業の横浜最古のレコード店「ヨコチク」にはレコードの発売より3か月ほど前にテスト盤が持ち込まれたといえます。そしてほぼ同時期に同名異曲「伊勢佐木町ブルース」が、横浜のナイトクラブ「ナイト&デイ」の専属歌手出身のデニー白川の歌唱により発売され、伊勢佐木町1、2丁目はデニー白川を応援、3〜7丁目は青江三奈を応援、商店街を2分して繰り広げられた「伊勢佐木町ブルース」のヒット曲争いは、青江三奈の圧勝となりました。



伊勢佐木町4丁目にある歌碑

この歌のヒットを機に伊勢佐木町は変貌をとげ、1978(昭和53)年には、アーケードを取り外し、電柱を無くしたショッピングモールを完成させました。



災害対策推進特別委員会

8月30日に減災対策推進特別委員会が開かれ、担当局から減災・防災を推進するための広報・啓発事業について説明を受け質疑を行いました。平時における確実かつ的確な広報や啓発は、災害発生時の命を守る行動を市民の方々に起こしていただくためにも重要な取組です。

総務局(危機管理室)関係 ●「広報よこはま」の活用。毎月全戸配布されている「広報よこはま」の6・9・3月号で風水害や災害の発生に対する備え等について解説しています。

●市ホームページやテレビ・ラジオ等を活用した広報啓発事業。ホームページでは、災害情報や地震の被害想定、台風や大雨に対する備え、市の防災計画、地域の防災対策、津波からの避難に関するガイドライン等を掲載し、テレビ神奈川では食料等の備蓄方法や防災グッズの紹介等を、FMヨコハマでは市民防災センターの紹介等を放送しています。

●各種ハザードマップの作成・配布(環境創造局・建築局連携)。ハザードマップは、身の回りの災害リスクを知るため様々な被害の予測を地図上に表したもので、洪水ハザードマップは河川の増水や堤防の決壊により氾濫した場合の洪水浸水想定区域や避難場所の位置、情報の入手方法が掲載され、内水ハザードマップは市街地に降った雨で下水道管や水路などから水があふれ浸水が想定される区域や浸水の深さなどをまとめた地図です。土砂災害ハザードマップは梅雨時期の集中豪雨や台風に伴う豪雨などにより土砂災害が発生した場合の被害想定区域を示しています。●横浜防災フェアの開催。子供から大人まで楽しみながら防災について学ぶことができます(年1回・赤レンガ倉庫イベント広場)。

●防災・減災推進研修。自治会町内会を中心とした防災組織の方々に地域で自助・互助の重要性を広報・啓発いただけるよう減災等の知識を学んでいただきます。また、講演会を実施して地域が主体となった防災活動を支援します。

消防局関係 ●横浜市民防災センター(神奈川区沢渡)で幅広い世代の方々が防災について興味や関心を抱くイベントを実施。29年度は45回開催し、3万5千人の市民が来場。

●防災教育の取組。消防局職員が小中学校に出向き、小学校では防災教育のスキルアップと子供たちの自主性を育てることを、中学校では地域防災の担い手として活躍してもらえるよう啓発を実施しています。

教育委員会関係 ●防災教育事業を実施。様々な災害発生時に避難行動がとれるよう毎年訓練を行っています。学年ごとに訓練の意義や自助・共助について学習しています。

特別委員会では、今回の紙面で紹介した以外の広報啓発事業についても説明があり、横浜市でも平時に多くの事業が実施されていることがわかります。重要なことは、こうした取組について市民の方々が実際に触れていただくことです。質疑の中で危機管理についてより理解を深め行動していただけるような工夫を進めるよう要望しました。